

# 居場所のなさを旅しよう

国際日本文化研究センター教授 磯前順一

いそまえ じゅんいち



国際日本文化研究センター提供

新刊の自著『居場所のなさを旅しよう』が店頭で並んだのを見届けて、飛行機に乗り込み、深夜の羽田空港を飛び立った。いつも旅の始まりは気が重い。「この時間に家にいたら、飼い猫とゴロゴロできたのに」、そんなことを思ってしまう。日常は暗黙のルールから成り立っている。それさえ覚えてしまえば、意識しなくても身体が自然に動く。本当に楽だ。その暗黙のルールを学ぶこと、それが文化を身につけるといふことなのだろう。その文化の安逸さから人間を引き離してくれるのが旅なのだ。浅い眠りに落ちるのを繰り返しているうちに、目的地のフランクフルト空港に着く。さらに電車で4

時間ばかり乗って、ドイツ南部のテュービンゲンまで、学術会議の報告に出かけるのだ。そう思うと、重いスーツケースを引つ張る手に自然と力が入る。電車を待つ2時間、小さなカフェでコーヒーをすすめる。機内にあふれていた日本語はもう聞こえない。通勤途中の人たちが話すドイツ語が、耳を通り過ぎていく。「自分のことは自分で守らなきゃ」。身体が覚醒し始める。テュービンゲン駅に着いて、歩いて5分のはずのホテルへの道を見失う。移民たちの集うトルコ料理屋に迷い込んだ。久しぶりに食べるケバブ料理は、安価な値段だが、私の食欲を十二分に満たしてくれ

た。迷ってよかった、そう思いさえする美味しさだった。

旅は人間を自由にする。日常を支配していた様々なルールが自明性を失うなかで、私たちは剥き出しの人間の本源の姿、ルールに守られていない脆弱な自分に出会う。

若い頃、出る杭は打たれる日本の社会が嫌いだった。自由な社会が世界のどこかに存在すると信じて、外国を彷徨っていた。いろいろな出会いがあった。しかし、素晴らしい出会いと同じ数だけ、残念な出会いもあった。夢のように居心地の良い場所というのは、どこかの国に具体的にあるものではない。人間は素晴らしくもなれるし、どこまでも愚劣にもなれる。世界中どこにでも共通する真理だ。国と

国、文化と文化、言葉と言葉の隙間にこそ、居場所のない人間のための余白がある。文化や社会の持つルールの傲慢さに気付く時、他者に、そして本当の意味で自分自身に、開かれた思考を紡ぐことができる。そのような発見を自分の人生の思い出とともに綴ったのが『居場所のなさを旅しよう』というエッセイ集である。

この本を執筆する際にずっと頭にあった言葉がある。私の友人である、日本思想史研究の酒井直樹さんが、コーネル大学での講演に私を呼んでくれた時かけてくれた言葉だ。

「どうあがいてみても、基本的に人間と人間はわかりあえないものなんだ。わかりあえないという謙虚な気持ちになって初めて、自分とは考えも感性も違う相手をありのままに認めることができる。その時に、相手は自分には理解しがたい存在として、そのわからなさそのものを受け入れる可能性も出てくるのだと思う」

自らの文化や母語から身を引き離し、その保護を欠いた自身の弱さに向き合った時、同じように孤独な人の存在に気付く、励まし合うことができる。だからこそ、私たちは旅に出かけるのだ。



『居場所のなさを旅しよう』  
発行：世界思想社

## 時の調べ Essay

**略歴**  
1961年、茨城県水戸市生まれ。国際日本文化研究センター教授、磯前プロジェクト室主宰、東京大学大学院人文科学研究所宗教学専攻博士課程中退。博士（文学）。専門は宗教学、批評理論。著書に『近代日本の宗教言説とその系譜』（岩波書店）、『死者のざわめき―被災地信仰論』（河出書房新社）、『石母田正』（ミネルヴァ書房）など